

國學院大學學術情報リポジトリ

研究ノート-国語教育における古典文の主語転換の指導法

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, 誠 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002074

国語教育における古典文の主語転換の指導法

A Teaching Approach for the Subject Conversion in Classical Japanese Language Education

岡田 誠

【要 旨】

本稿は、高等学校や予備校の現場で質問の多い「古典文の主語転換」について考察するものである。主に「主語の判定の問題」と「主語の転換と接続助詞」を扱うものである。主語を判定する上で、述語に注目していく方法、特に、尊敬語の有無による方法は、従来行われてきたものである。ところが、新たに便法として、接続助詞「て・で・つつ」の前後では主語は同一とするものや、「を・に・が・ば・ど」などの前後では主語は変わるなどとする、接続助詞によって主語を捉える方法が出現してきた。このように接続助詞にこだわる方法は、明快な主語判定法のようにも見えるが、その一方で、主語のルールに心を奪われて形にこだわりすぎ、かえって主語がわからなくなる生徒を多く生み出す結果になってきている。

古典文の主語をつかむために必要なこととして、「接続助詞」に注目しすぎることなく、「最終的には文脈と述語を見て論理的に主語を判断する」という、基本の大切さを再認識することが大切である。述語を見てからでないで最終的な判断を下せないという、基本的なことを、指導する側も強調する必要があるであろう。その点で、現在の予備校で行われている接続助詞にこだわりすぎた主語転換の指導法は行き過ぎた面がある。語法面で真摯な態度をとる必要がある。例外のない公式として押し付けず、じっくりと、そして真摯に古典文を読解するという態度が指導する側に必要である。

【キーワード】

主語転換 尊敬語の有無 接続助詞 述語 文脈判断

【Abstract】

This research note discusses the change of a subject in Classical Japanese in Japanese education. There are many questions in a high school or a cramming school. It is the change of subject in classical Japanese in Japanese education. I report on the judgment and a conjunctive particle of subject, especially, a traditional method focusing on whether or not honorifics were involved. An honorific language is used for the judge of the subject, but the other method appears in the judgment of the subject. This method relates to a conjunctive particle: "te", "de", "tsutsu", "wo", "ni", "ga", "do", and "ba". The front and the rear parts of these conjunctives have the force to change the subject in a sentence. The subject of "te", "de", and "tsutsu" does not alter in a sentence, while, the subject of "wo", "ni", "ga", "do" and "ba" changes in a sentence. This method looks clear and useful, but the method of these conjunctive confused many students in comprehending the meaning of a passage according to the rule. The change of Classical Japanese subject in the context and the predicate is fundamental and essential to understanding the meaning of a passage. I disagree with a conjunctive but agree with the context and the predicate. The method of conjunctive is often used in a cramming school, but I do not agree to the method, as it is too much. The careful reading of the Classical Japanese is essential in Japanese education. A teacher of Japanese should recognize the importance of reading Classical Japanese in more depth. In addition, a teacher should not force the rule of subject, but a

teacher of Japanese should have a sincere attitude toward reading Classical Japanese sentences.

【Keywords】

Subject conversion; honorific expressions; postpositional particle; predicate; comprehending the meanings from the context

序

古典文の主語についての理解は、読解の上で重要である。特に、予備校の現場では、近年は接続助詞の断続機能に着目して読解しようとする傾向が強まってきており、このことは別記の類には示されることはないが、予備校講師の執筆による学習参考書には掲載されることが一般的になってきている。また、敬語に着目して主語の転換を見る方法は従来行われてきたが、接続助詞に注目して主語を見つける方法は、適用するときに注意が必要な技術であると思う。「接続助詞」についての先行研究から、「て」と「ば」を主とした「主語の転換と接続助詞」の問題点を述べてみることにする。なお、本稿では国語教育の立場で論述するため、日本語学的に主格と主題に分けずに「主語」として論述することとする。古典文学作品の引用は主に『日本古典文学大系』（岩波書店）を使用した。表記を一部漢字に改めた箇所がある。

1 主語の判定法について

古典文の主語の判定は、読解の上で重要である。そのため、現在では主語の判定法について、受験参考書などでも詳しく説かれるようになってきた。予備校や高等学校の現場で多く使われて影響を与えてきた石井秀夫（1985）では、「主語や動作主体の見分け方」として以下のように12の公式を述べている。

- 述語は文末にくることが多い。述語を手がかりに一文の主語を求めよ。
- 主語・動作主体が明示されている場合もある。
- 主語・動作主体が省略されている場合が多い。文脈から判断する。
- 接続助詞「ば・を・に」などをはさんで、上下の主語が転換することが多い。
- 接続助詞「て」をはさんで、上下の主語が転換することがある。
- 接続助詞「ど・ども」などをはさんで、上下の主語が転換することが多い。
- 登場人物は、最高敬語、ふつうの敬語、敬語なしのいずれであるかをまず明らかにし、それによって主語を判定せよ。
- 天皇や上皇・中宮などには、二重敬語を含めて最高の待遇をする。最高敬語の主語は皇室関係者。ただし、一つだけの待遇もある。
- 『枕草子』で地の文に二重敬語がついているのは、天皇・中宮定子のほかは関白に

なった道隆・道長ぐらいである。

○『源氏物語』では、光源氏に地の文で二重敬語をつけるのはかなり後のこと、敬語は一つと考えよ。

○『源氏物語』で、地の文中に二重敬語があったら、その主語は天皇であると考えよ。

○「は」となっている主語となるとは限らない。

以下、石井秀夫（1985）、関谷浩（1990）、桑原聡・柳田緑（2004）を参考に、現在、予備校の現場で示されている主語についての事柄の要点をまとめてみることにする⁽¹⁾。

1.1 助詞の省略

第一に、古文では主語を示す助詞の「は・が」が省略されることが多いことがあげられる。したがって、

○悪人（ハ）なほ往生す。いかに況んや、善人をや。『歎異抄』

○秋（ガ）来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる『古今和歌集』のように、主語を示す「は・が」を補って口語訳する必要がある。この点については、村上本二郎（1966）が省略の構文として「古典では、主格を示す『が』を書き表さないのが普通である」と述べているが、関谷浩（1990）は、「現代語の『は』は、『が』『を』の意味を背後に持っているので、『が』で強すぎるなら『は』としてもよい」と述べている。そして、桑原聡・柳田緑（2004）は、「主語には『が』や『は』の付かないことが多い」「名詞の後に読点『、』が付いていれば、主語ではないかと疑ってみる」とルール化している。

また、主語を示す「の」にも注意が必要で、

○雪の（＝ガ）降りたるはいふべきにあらず。『枕草子』

のように、主格の「の」にも気をつける必要がある。

森野宗明（1971）では「主語の現れ方」として、

- 1 体言だけ
- 2 体言＋格助詞の・が
- 3 体言＋副助詞・係助詞
- 4 準体用法としての連体形
- 5 連体形＋格助詞が
- 6 連体形＋副助詞・係助詞

のように6項目に整理し、「2と5は連体修飾語で、それ以外は連用修飾語の場合もあるので注意する」と述べている。

1.2 主語の省略

第二に、省略の問題があげられる。前の文での主語が、次の文でも同じ主語として継続されるために、文脈上、省略されることも多いことがあげられる。例えば、桑原聡・柳田緑（2004）にあげられている、

○人のもとに宮仕へしてある生侍（ガ）ありけり。（その生侍ハ）することのなきままに、清水に人真似して、千度詣で二度ぞしたりける。『宇治拾遺物語』

のような例である。また、

○夕暮れは火の燃え立つ（様子）も見ゆ。『更級日記』

のような準体法の際の補いにも注意する必要がある。

日記・随筆・評論・和歌では、わかりきった主語は省略され、文章中に作者が登場する。主語の書かれていない心情語や謙譲語の主語は、作者であることが多く、会話文での謙譲語と丁寧語の書かれていない主語は、一人称あるいは二人称になることが多いことがあげられる。例えば、

○（私ハ）さればよと思ふに、ありしよりもけにもものぞ悲しき。『蜻蛉日記』

○「それは人にしたがひてこそ」と（私ハ）申せば、『蜻蛉日記』

○御几帳へだてて（私ハ）よそに見やりたてまつるだにはづかしかりつるに、…。『枕草子』

のように、日記や随筆で主語の書かれていない心情語や謙譲語の主語は、いずれも一人称主語である。謙譲語は「対象尊敬」とした時枝誠記（1941）の説よりも、読解で主語判定としては、謙譲語は「一人称主語」とした山田孝雄（1908）の説のほうが有効であることを示しているであろう。

また、塚原鉄雄（2002）は、

王朝初期の仮名文学では、転換する主語は、述語が、作者の行動を表現する場合に限定して、省略されるに過ぎなかった。けれども、時代の下降に伴って、爾他の人称にも、波及するようになった。

と史的変遷について言及している。

1.3 接続助詞「て」「で」「つつ」

第三に、接続助詞の「て」「で」「つつ」の前後についての問題がある。例えば、接続助詞「て」「で」「つつ」の前後では、

○枝（ガ）細くて咲きたる。『枕草子』

○（私たち一行ハ）粟津にとどまりて、師走の二日、京に入る。『更級日記』

のように、主語が同じことが多いのだが、主語が変わることもある。桑原聡・柳田緑（2004）は、「て」の前後で主語が変わるケースについて、「雨が降って、運動会は中止になった」という現代語の例文を示し、「『ので』と言い換えられる『て』」とし、「〈原因・理由〉＋て→〈結果〉の場合は、「て」の前後で主語が変わる」と述べ、

○（私ハ）住む館より出でて、（私ハ）船に乗るべきところへ渡る。『土佐日記』

○おのおの（＝それぞれの人ハ）拝みて、（それぞれの人ハ）ゆゆしく信おこしたり。『徒然草』

のように、「て」の前後では主語が同じことが多いが、

- (あたりガ) いと暗くなりて、(私ハ) 三条の宮の西なる所に着きぬ。『落窪物語』
- また、別当資朝、蔵人内記俊基、同じように(資朝ト俊基ハ) 武家にとらへられて、(幕府方デハ) きびしくたづね問ひ、守りさわぐ。『増鏡』

のように、「て」が「ので・から」などの原因・理由を示す場合には、主語の転換が起こることを示している。しかし、この説明は前後の文脈と述語に着目した説明となるため、「て」に注目する必然性が感じられない。しかも、竹部歩美(2000)の『源氏物語』を資料とした調査結果によると、「て」の本質が見て取れる形容詞・形容動詞に下接するものについては、「て」(623例)を「因果関係(308例・49.4%)」「並立関係(30例・4.8%)」「全体部分関係(42例・6.7%)」「情態修飾関係(243例・39.0%)」に分類すると、「情態修飾関係」のときに「て」を挟んだ前件の独立性が高くなり、前件と後件の主語が異なる現象が起こる例が見られるとのことであるから、原因・理由(因果関係)のときの転換という説明には疑問が残る。しかも、「て」全体の比率を考えても「情態修飾関係」は39.0%と高いので、「て」の前後で主語転換が起こるのは当然と言える。また、時枝誠記(1950・1954)のように「て」の断止機能を重視する立場もあることを考え合わせると、小西甚一(1962)のように、「て」は単につなぐ機能として処理する考え方も一つの方法であろう。

1.4 接続助詞「を」「に」「が」「ど」「ば」

第四に、接続助詞の「ば(已然形接続)」「を」「に」「が」「ど」「ども」の前後の問題がある。例えば、接続助詞「ば」「を」「に」「が」「ど」の前後では、

- (かぐや姫ハ) いと幼ければ、(竹取の翁ハ) 籠に入れて養ふ。『竹取物語』

のように、主語が変わることが多いのだが、主語が変わらないこともある。桑原聡・柳田緑氏(2004)では、主語が変わらないときの「ば」は、「自分自身の中に〈原因・理由〉がある場合は、『ば』の前後で主語が変わらない」と述べて、

- (この鳥ハ) 京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。『伊勢物語』

のように、「ば」の前後では主語が転換しているが、

- (私ハ) 悩ましく思ひければ、(私ハ) 寝たり。『蜻蛉日記』

のように、主語が転換しない例をあげている。つまり、心情語の下に「ば」が下接していれば、主語が転換せず、同一であると解釈できる。しかし、「別かれてはほどをへだつと思へばやかつ見ながらかねて恋しき(古今集)」の例は、「心情+ば」であっても、主語は同一である。森重敏(1965)のいう、

接続助詞「ので」「から」にしても、単にその前後両句の格を意味するすけではなく、それを超えて含む情意がある。

という捉え方になるのではなかろうか。したがって、例外を「心情+ば」で説明しようとしても限度があると考えられる。

1.5 尊敬語の有無

第五に、尊敬語の有無で主語が判断できることも多い。例えば、

- もはらさやうの宮仕へつかうまつらじと（私ハ）思ふを、（竹取の翁ハ）強ひて仕うまつらせ給はば、（私ハ）消え失せなむず。『竹取物語』
- 「少納言よ、香炉峰の雪はいかならむ」と（中宮様ハ）仰せらるれば、（私ハ女官ニ）御格子あげさせて、（私ハ）御簾を高くあげたれば、（中宮様ハ）笑はせたまふ。『枕草子』

の例をあげることができる。この法則は、基本的なもので、森野宗明（1971）も、人事に関する叙述では、述語における敬語の有無、使用されている敬語の用法が、主語をわりだす重要な手がかりになる。・・<中略>・・もちろん、動詞の意味や場面なども多角的にみる必要があるが、敬語の知識をまずゆたかにし、それを活用したい。

と述べ、「せ・させ給ふ」対「給ふ」という敬意の度の大小の例として、

- その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなむとし給ふを、（帝ハ）いとまさらに許させ給はず。年ごろ、（御息所ハ）つねのあつしさになり給へれば、御目なれて、「なほ、しばしころみよ」とのみ（帝ハ）のたまはするに、（御息所ハ）日に重り給ひて、ただ五六日のほどにいと弱うなれば、母君、泣く泣く奏して、（母君ハ）まかでさせ奉り給ふ。『源氏物語』

をあげている。桑原聡・柳田緑（2004）は、「三種類の人がいる」として、「かなり高いレベルの敬語が用いられている人」「普通レベルの敬語が用いられている人」「敬語がまったく用いられていない人」と分けて述べている。

ただし、塚原鉄雄（2002）の中で、

一体、敬語法が、客観的な身分関係に基づいて用いられるようになるのは、天皇などに対する「絶対敬語」を除けば、中世以降である。それまでは、客観的な条件も、無論、考慮されるけれども、主観的な相対的評価に、よりウエイトが置かれたのである。と述べており、国語教育で行われている敬語に注目した主語の推測にとらわれすぎるのは注意が必要であると言える。この点については、村上本二郎（1966）も、

- （供人が作者に）「・・あなかしこ（決して）おびえ騒がせ給ふな。息もせて臥させ給へ」『更級日記』

という会話文での例をあげて、「『せ給ふ』『させ給ふ』は、会話文では、天皇・皇后・皇太子以外の人にも広く用いる」と公式として述べている。このことに関しては、岡崎正継（1981）の敬語の記述、すなわち、

敬語は、敬意を表現するために用いるほか、わきまえの表現やよそよそしさの表現などのために用いる場合もある。したがって、敬語は、ある対象（相手〈聞き手・読み手〉や話題の人物など）に対する敬意を表現するものにとらえるよりは、ある対象を高く遇することによって、その対象に対する敬意・わきまえ・よそよそしさなどを表現するものにとらえる方がよい。

という考え方がたいへん参考になる。この考えで捉えれば、例外も処理できる。なお、小西甚一（1962）は、述語に注目するよりも文脈に注目すること、敬語に注目することの二点に集約して解説している。

1.6 古典の背景知識

第六に、古典の背景知識、つまり、小西甚一（1955）の述べる精神的理解の必要性で判断することも必要になるケースの存在があげられる。この点について、桑原聡・柳田緑（2004）は、「書かれない主語」として、ポイントとして、以下の四点にまとめている。例文とともに整理して示してみる。

- 1 わかりきった主語は省略される・・日記は自分のことを書く。

長月ばかりになりて、（兼家ガ）出でにたるほどに、（私ハ）箱のあるを手まさぐりに開けて見れば、人のもとにやらむとしける文なり。『蜻蛉日記』

- 2 身分の低い人も省略される・・家来や侍女など身分の低い人は、主語として提示されない。

つとめて、ここに縫ふ物ども（兼家の家来ガ）取りがてら、「昨日の前渡りは、日の暮れにし」などあり。いと返り事せま憂けれど、「なほ、年の初めに腹立ちなそめそ」など（作者に仕えている女房ガ）いへば、（私ハ）少しはくねりて書きつ。『蜻蛉日記』

- 3 日記は読まれることを前提に表現されている・・読者が主語になることもある。

日の経るままに、いと弱げにのみならせたまへば、このたびはさなめり、と見まるらする悲しさ、ただ、（読者ハ）思ひやるべし。『讃岐典侍日記』

- 4 文脈に応じて省略される・・前の文からの続きで主語が明らかにわかる。

人のもとに宮仕へしてある生侍（ガ）ありけり。（その生侍ハ）することのなきままに、清水に人真似して、千度詣で二度ぞしたりける。『宇治拾遺物語』

これらは、むしろ、小西甚一（1962）のように、文脈優先主義で、古文の精神的理解としたほうがよいものであるが、桑原聡・柳田緑（2004）は、このように、はっきりと公式化している。

2 主語の転換と接続助詞の問題点

古文の主語の判定で、まず説明を受けるのは、尊敬語の有無である。しかし、エチケットや皮肉を込めるために用いることもある待遇表現であり、塚原鉄雄（2002）のいう、「主観的な相対的評価」であるために、省略や例外も多い。そのため、塾や予備校の現場では、接続助詞の「て」の前後は主語が同じであることが多く、接続助詞の「ば」の前後は主語が変わることが多いという法則を立てて判定していくことが多い。それでは、山田孝雄（1908）・松下大三郎（1928）・湯澤幸吉郎（1940）・時枝誠記（1954）・阪倉篤義（1975）・

山口堯二（1980・1996）・小林賢次（1996）を始め、「て」と「ば」のような条件表現の研究として扱われてきたものは、どのような影響関係で、接続助詞の「て」「ば」に注目して主語を判定することが行われてきたのであろうか。ここでは、主語と接続助詞について述べた学習参考書の初期のものと思われる、森野宗明（1971）・石井秀夫（1985）・関谷浩（1990）の著作をもとに論じてみたい。また、接続助詞と主語との把握を論じた塚原鉄雄（1956・1957・1958 a・1958 b・1958 c・1960）の一連の研究を中心に引用し、検証してみたい。

2.1 「て」の前後をめぐって

主語と接続助詞との関係を論じた学習参考書は、森野宗明（1971）を嚆矢として、石井秀夫（1985）で扱い、さらに関谷浩（1990）で接続助詞の「て」に注目した主語の転換に言及している。特に、関谷浩（1990）の「第一講 逐語訳と内容を大づかみにする方法」の中で構造的に読解する一方法として接続助詞に注目する方法を述べたことは、その後の予備校講師に大きな影響を与えたとされている。その影響で、

接続助詞の「を・に・が・ど（ども）・ば・ものの（ものを・ものから・ものゆゑ）」の前後は主語が変わりやすく、接続助詞の「て・で・つつ・ながら」の前後では主語が変わりにくい。

などとする説明が大手の予備校の衛星中継でも流れ、講師室の生徒の質問でも行われ、予備校テキストや学習参考書にも書かれることが多くなっている。しかし、これは拡大解釈した結果といわざるを得ない。関谷浩（1990）は、

- （接続助詞の）「て・で・つつ」などは叙述を完結する力がないので、掛っていく文節を求めながら、切らずに下へ読み進めていく。ただし、係っていく語句は直下にだけとは限らず、間を隔てて係ることもあるので、注意を要する。
- （接続助詞）の「ば・ど・に・を・が」などは、ある程度叙述がまとまったところに付くので、そこで意味のまとまりを想定していく。「に・を」は格助詞でも接続助詞でもかまわない。「ば・ど・に・を・が」で、主体は変わっても変わらなくても、どちらでもよいのである。「ば・ど・に・を・が」は係る用言との関係で考えるのである。

と述べているからである。さらに、関谷浩（1990）は「ば」について、「甲ガ乙ニ・ヲーば」で切れて、「乙ガー」のように主体が変わることを述べているが、「例外は文が教えてくれるので、例外以外は原則通りと考えて読むのである」と、このあたりの記述が独り歩きしたのではないだろうか。あくまでも関谷浩（1990）は、断続機能に言及したものであり、例外にも言及しているのである。

ここで、用例数の多い接続助詞「て」の扱いについて考えてみたい。「て」は多くの意味を含んでおり、中村幸弘・高橋宏幸・碁石雅利（2001）では「て」を「推移・継起」「列挙・並列」「状態」「原因・理由」「逆接の確定条件」「補助動詞を下接」に分類し、田辺正

男・和田利政（1964）や岡崎正継・大久保一男（1991）では「先行事態」「平行事態」「補助語をつくる」と三つに分けて説明している。

前件・後件との関わりとしては、松尾聡（1973）は「上に示された動作・作用・状態が終わって、他の動作・作用・状態に移ることをあらわす意であるのが普通」としている。

また、塚原鉄雄（1958a）では、

接続助詞〈て〉は、現代語のそれと異なり、この助詞を介して接続する二語の分離性を明示する機能を持つ。たとえば、「いひやる」といえば〈言ッテヤル〉に相当するが、「いひやる」なら〈言ッテ、(何カラ)ヤル〉というほどの意味となる。すなわち、「取りてたまへ」（竹取）は、「取りたまへ」とは別で、〈取ッテ、ソレヲたまへ〉という意味だし、「夜ふけて来れば」（土佐、二月一六日）は、〈夜ガフケテクルカラ〉ではなくて、〈夜ガフケテカラワタシタチガ来ルノデ〉と解さなくてはならない。

と述べている。さらに、「観点の転換」として、

○夜（ガ）ふけてくれば、処どころも見えず。『土佐日記』

の例では、「夜がふけてから私たちが来るので」と解釈し、

○舟出してゆく。（太陽ガ）うらうらと照りて、漕ぎ行く。『土佐日記』

○よき日いできて漕ぎゆく。『土佐日記』

の例では、「漕ぎゆく」のは作者を載せた船の行動に転換していると述べている。この「観点の転換」について、

作者の観点が、ひとつのセンテンスの中で、移動して転換しているわけである。通常は、そうした転換を意味する語句が、センテンスのなかに存在するのだが、そのような場合には、注意を要する。日本語の特色のひとつで、後世になると、鎖型構文によって展開する複雑なものが生じるけれども、まだ、この時期のものは比較的単純で、転換は、作者の行動を叙する場合に限って現れるようである。

と述べており、「て」の前後で主語が転換するケースも多くあるため、文を見渡すことの大切さを説いており、読解の上で重要な指摘である。

では、学習参考書の記述としてはどうなのであろうか。森野宗明（1971）・石井秀夫（1985）・関谷浩（1990）の記述を整理してみると次のようになる。

◇森野宗明（1971）・・「接続助詞の前後で主語の転換が起こることがよくある」

◇石井秀夫（1985）・・「接続助詞『て』をはさんで、上下の主語が転換することがある」

◇関谷浩（1990）・・「接続助詞の『て』の前後では動作主体は同一である（すべてではない）」

このように整理してみると、森野宗明（1971）は接続助詞の性質に注目したもので、石井秀夫（1985）から次第に「て」について着目していったことがわかる。石井秀夫（1985）の記述は、塚原鉄雄（1960）の、

古代語では、接続助詞「て」の意味的な断絶機能が、すこぶる旺盛だから、文脈に依存しながらも、《主語》の転換する例が少なくない。

とする論に近いといえる。

また、関谷浩（1990）は「第四講 て」の中で、「主体・主語は同じであることが多い」とする記述を行い、「主体・主語が表示上違っていたり、明らかに異なると考えられる」ときは例外としている。さらには、『て』という助詞の前後で、主体・主語が変わる変わらないは結果の問題である。読む時は、常に『・て、ドウスル』と読み、あらゆる面から矛盾のない読みをすることが大切である」と述べている。それにも関わらず、この記述が独り歩きし、拡大して『て』の前後は主語が同じ」という説明を施す予備校講師が多くなっていったことが推測される。

2.2 接続助詞と主語転換への反論

この接続助詞に注目する方法には例外も多いにも関わらず、支持する予備校講師が主流になっていく中であって、反対の立場に立つ意見もある。特に、塚原鉄雄に師事した山本康裕（2006）は、次のような「て」の前後で主語が変わる例を入試問題も交えながら、

- （帝は）かぐや姫の御もとにぞ、御文を書きて通はせ給ふ。（かぐや姫は）御返り、さすがに憎からず聞こえかはし給ひて、（帝は）おもしろき木草につけても御歌をよみてつかわす。『竹取物語』
- （宮は）「さは、今日は暮れぬ。つとめてまかれ」とて、御文書かせたまひて、（宮は童に）たまはせて、（童は）石山に行きたれば、（式部は）仏の御前にはあらで、…。『和泉式部日記』
- 夜更けて（紀貫之たち一行が都へ）来れば、ところどころも見えず。『土佐日記』
- 行き過ぐるままに、（雑色たちが）大傘を引き傾けて、（少将と帯刀は）傘につきて屎の上に居たる。『落窪物語』
- （朝廷は）大宰権帥になしたてまつりて、（菅原道真は）流されたまふ。『大鏡』
- 「然らば二十七日は我が心ざしの日なれば、ここにて一飯必ず」と（石川丈山は）約束して、（小栗は）立ち行きぬ。『武家義理物語』

などの例をあげて、

接続助詞「て」は、本来、完了の助動詞「つ」の連用形である「て」から、転じて成立したものである、といわれておりまして、断止機能（叙述を中断させる働き）があります。だから、右のように、主語が変わる例が、見られるのです。現代語・現代文の「て」では、ほとんど主語は、かわりません。古典語に存在した断止機能が、弱まったためかと思われます。…<中略>…最近では、講師たちのトーンが少し落ちて来て、「『て』で主語はかわらないことが多い」などと書いてあります。「かわらない」と断定していた時代よりは、数段改善されましたが、まだまだダメです。いらんことは、言わないほうがいい。生徒たちは、日常語で、主語がかわらない「て」を使っています。腹の中に、入っていますよ。古文も日本語なのだから、ほっといても理解しますよ。「法則だ・方式だ・公式だ」と、いかにも有効な手段であるかのように、言挙げ

する。いやですねえ。「て」について、「主語が変わりにくい」などと書いてある参考書は、国語学・国文学を、キチンと学んでいない、言わば「素人」であることを、自ら告白している本だと言ってもいいでしょう。プロはそんなこと言わない。この風潮も、受験産業が生んだ、一種の「徒花」かもしれません。

と痛烈に批判し、接続助詞「て」に注目する方法に反対している。山本康裕（2006）は、参考文献として、塚原鉄雄（2002）をあげているので、「て」の「断止機能」を本質として論じていることが推測される⁽²⁾。

ここで、接続助詞に注目した際に生じた主語の転換の例外をどう処理するかが問題となるであろう。そのことを述べた参考書は、桑原聡・柳田緑（2004）である。桑原聡・柳田緑（2004）では、「て」が「ので・から」という原因・理由の意味になるときと、「ば」が心情を表す活用語に下接するときには例外が生じるとしている点で、一步踏み込んだ解説を加えているといえるであろうが、

○（帝ハ）御胸ふたがりて、（帝ハ）つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。『源氏物語』

の例では、「て」は原因・理由の意味であるにも関わらず、主語は変わっていない例もある⁽³⁾。

塚原鉄雄（1969・1987）が、接続助詞を『『AガB＋接続助詞＋CガD』という形式で、『AガB』と『CガD』とが、どんな関係で接合し、一つの文を構成するかを示す。このような働きを持つ助詞を接続助詞という」と定義し、

条件接続の接続助詞（第一種接続助詞）

「AガB＋接続助詞＋CガD」の形式で、「CガD」が実現するには、「AガB」の影響があることを表現する接続助詞

ば・と・とも・ど・ども

列叙接続の接続助詞（第二種接続助詞）

「AガB＋接続助詞＋CガD」の形式で、「AガB」が「CガD」の実施に影響を与えるかどうかについて考慮しないことを表現する接続助詞

て・で・つつ・して・に・を・も・ものの・ものを・ものから・が

と分類したことも考慮する必要がある。また、「て」について、塚原鉄雄（1958c）は、「普通、①叙述を中止して続けるのと、②移行する用言を修飾するのと二つの機能が説かれている。しかし、本義からすれば、既に説いたように、いずれにしても、概念的に独立する語句の独立性を保ちながら、形態的な連続性を形成する機能である」とし、用例調査を行った竹部歩美（2000）も、「助詞テの機能は、テの上接部分の叙述をいったんまとめ、したがって、その叙述を後続の叙述に対して独立性の高いものとしてその部分でいったん切り、更に後続の叙述へと接続するというものであると考えることができる。」と結論づけている。

広く考えれば、「て」だけの問題ではなく、森重敏（1965）にあるように、接続助詞には情意があるため、主語判定の例外は避けられないのであろう。

このように、さまざまな要素を含むために、接続助詞による主語の判定は参考程度にしかならないため、法則化には向いていないといえる。

以上の点からも接続助詞を中心とした主語の転換を述べることは好ましくないということが出来る。最終的には、文脈と述語を見てから主語を判定するという原則を第一として説明する必要があると思う。その意味で、以下の鈴木一雄（1991）の示すような基本的な「主語・述語発見の要点」を見直す必要があるのではないだろうか。

要点①

まず述語に注目し、その述語の対応する主語を見つけること。いつも主語のすぐ下に述語がくるとは限らない。

要点②

日本語では主語を表に出さないことが多いから、「隠された主語」の発見につとめる。この場合も、述語にまず注目すればあやまることがすくない。

要点③

述語の検討には、とくに敬讓の言い方に注意すること。尊敬・謙讓・丁寧の用法から、主語の身分で待遇関係を割り出すこと。

要点④

主語・述語の関係が、遠くへだてられている場合があるから注意すること。

要点⑤

主格を示す格助詞「の」「が」を手がかりにすること。

結び

本稿では、主語及び主語の転換についての指導について、主に七つの方法によって、塾・予備校の現場で解説講義されることが多いことを示した。たしかに、主語同一・主語転換の性質を分類整理することは読解の目安になるためには必要である。しかし、一方でテクニックとして意識しすぎて、逆に主語がわからなくなっている生徒を多く生み出しているという現状があることにも注意しなければならぬ。そこで、「最終的には文脈と述語を見て論理的に主語を判断する」という基本の大切さを再認識することを主張したい。この「文脈と述語を見て主語を判断する」という基本原則は、日本語のルールとして大切なことである。述語を見てからでないと最終判断しにくいのである。主語のルールを適応することに心を奪われて、述語を見ないで主語を決めてしまう生徒が多くなっているという現状にも配慮する必要がある。これは、述語を見てからでないと最終的な判断を下せないという本質的な論理が、おろそかになっている結果であると思う。指導する側も、語法面で真摯な態度をとる必要があるのではないだろうか。塚原鉄雄（1958 a）の「鎖型構文」「観点の転換」、小松英雄（1997）の「接続構文」という特徴を肝に銘じておく必要がある（注4）。例外のない公式として押し付けず、じっくりと、そして真摯に古文を読解するという態度が指導する側にも必要ではないだろうか。

(補説)

1

塚原鉄雄(1958b)は、接続助詞と接続詞との機能の違いについて以下のように述べている。

接続機能を具有する単語には、別に接続助詞があるが、これは、前行する語句の性質を、後行する語句に接続するものとして規制する。活用語に接続するときに明白となるが、接続助詞は、もしそれを欠けば、非連続である現象を、形態的に連続させる、いわば《非連続の連続》を、その接続機能において実現する。ところが、接続詞の場合は、これと異なる。接続詞の介在は、これを挾持する表現自体の性格に、影響を与えることがない。それらは、相互に、独立性を保持しながら、しかも、孤立性を喪失して、関連性を賦与されるというのが、接続詞の機能である。その接続機能は、《連続の非連続》と称してよかろう。むしろ、《非連続の統合》と呼んでもよい。

2

「は」「が」については数多くの諸説があるが、日本語教育としても重要な論稿としては、松村明(1942)と野田尚史(1996)のものがある。松村明(1942)は、それまでの諸説に再考を加えて、『「が」は話手或は聴手の観念にないものとして述べるに対して、『は』は既に話手或は聴手の観念にあるものとして述べられるのである』としている。野田尚史(1996)は、構造的に対比の「は」と排他の「が」を、

【伝えたいこと】**が**【主題】

【主題】**は**【伝えたいこと】

としている。たとえば、「あいつ**が**許せない」だと、許せないのは、あいつであり、他の人ではないことを示し、「あいつ**は**許せない」だと、あいつについて許せるか許せないかと考えると「許せない」になり、他の人について考えると「許せない」ことになる。

3

格成分で考えると、「AがBに—伝達系の動詞+ば、Bが—」や、格関係を変換するヴォイスが使用されると、主語転換が行われることがいえそうである。また、客観的事態と主観的事態でとらえると、客観的事態が主観的事態を適応させようとする際に主語転換が起きることも考えられる。

注

- (1) 小西甚一、石井秀夫、村上本二郎の著作は、現場で多く使用されたものであるとの、中村幸弘先生のご教示による。
- (2) 南不二男(1974)により、階層的文構造論の立場から、「て」は従属節を作り、A類(同時動作)、B類(条件節)、C類(逆接・並列)の三つの分類にまたがるもの(様態・理由・並列)であることが示され、さらに南不二男(1993)では、A類(付帯状況)、B類(継起・並列・原因・理由)、C類(提題や陳述副詞を含む「て」と分類しているので、山本康裕(2006)の現代語の記述の箇所については、疑問が残る。また、島田勇雄(1958)は、井原西鶴の文章は「て」が多く、「を・

に・が・ども」が少ないことを述べている。

- (3) 日本語学の研究としては、近藤泰弘(2000)がある。近藤泰弘(2000)は、南不二男(1974)の階層的文構造論を古典でも適用し、近藤泰弘(2007)では、平安時代の複文は、従属節と主節との区分をすることが難しく、節が次々と連なっていく、「節連鎖」的な特徴を持つことを示し、その中でも、「て」接続助詞による接続の節は、連鎖的な機能が強く、副用語的なものと純粋な接続表現ををなし、純粋な接続表現は、「継起」や「原因・理由」を示すことを述べている。さらに近藤泰弘(2012)では、次のように「て」を分類している。

A類	て(A類)・ながら・ず・で・用言連用形	副助詞・接続助詞後接
B1類(順接)	て(B類)・ば・(く)は・つつ・ず・で	係助詞後接
B2類(逆接)	とも・ども・ものの	どちらも後接せず
C類	を・に・が	どちらも後接せず

※統語的機能の異なりとして、A類はアスペクト・テンス・モダリティを含まず、「て」は付带的状況などを示し、B類は「む」「らむ」などを含まず、「て」は「並列」「継起」「原因理由」などを示し、C類はそれらをほとんど含むとしている。

また、小松英雄(1997)の中で「中古和文の接続構文」ということを述べており、末尾に至るまで全体像がわからないことを示している。

参考文献

- 石井秀夫(1985)『文章吟味の公式』聖文社
 内丸裕佳子(2005)「形態と統語構造との相関 - テ形に関する分類方法の検討 -」『筑波応用言語学研究』12
 内丸裕佳子(2006a)「等位接続に現れる形容詞・形容動詞のテ形について」『筑波応用言語学研究』13
 内丸裕佳子(2006b)「動詞テ形を伴う統語構造について - 付加構造と等位構造との対立を中心に -」『日本語の研究』第2巻1号
 岡崎正継(1981)「敬語」『日本文法事典』有精堂
 岡崎正継・大久保一男(1991)『古典文法 別記』秀英出版
 桑原聡・柳田緑(2004)『これでわかる古文・漢文』文英堂
 小西甚一(1955)『古文研究法』洛陽社
 小西甚一(1962)『古文の読解』旺文社
 此島正年(1959)「接続助詞『て』と『して』」『國學院雑誌』10・11月号
 小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
 小松英雄(1997)『仮名文の構文原理』笠間書院
 近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
 近藤泰弘(2007)「平安時代語の接続助詞『て』の機能」『國學院雑誌』第108巻11号
 近藤泰弘(2012)「平安時代語の接続助詞『て』の様相」『国語と国文学』第89巻2号
 阪倉篤義(1975)『文章と表現』角川書店
 島田勇雄(1958)「西鶴の文法」『日本文法講座 4 解釈文法』明治書院
 進藤咲子(1973)「接続助詞」『品詞別日本文法講座 9』明治書院
 鈴木一雄(1991)『精選古典国語』学生社
 関谷浩(1990)『古文解釈の方法』駿台文庫
 関谷浩(2013)『古文解釈の方法 改訂版』駿台文庫
 竹部歩美(2000)「中古のテについて - 形容詞・形容動詞に下接する場合に着目して -」『國學院大學大学院紀要 文学研究科』第32輯
 田辺正男・和田利政(1964)『学研 国文法』学習研究社
 塚原鉄雄(1956)「鎖型構文」『平安文学研究』第18集
 塚原鉄雄(1957)「叙述観点の移動と挿入 - 竹取物語新釈断章 -」『解釈』第3巻9号
 塚原鉄雄(1958a)「竹取・伊勢・土佐の文法」『日本文法講座 4 解釈文法』明治書院

- 塚原鉄雄 (1958 b) 「接続詞」『続 日本文法講座 1 文法各論編』明治書院
- 塚原鉄雄 (1958 c) 「接続助詞 - ば・と・ども・とも・て・つつ・で・を・に・が - 」『国文学 解釈と鑑賞』第23巻4号
- 塚原鉄雄 (1960) 「主語と述語の把握と文法」『講座 解釈と文法 1 総論』明治書院
- 塚原鉄雄 (1969) 「ば〈古典語・現代語〉」『古典語現代語 助詞助動詞詳説』学燈社
- 塚原鉄雄 (1977) 「国語助詞の構文機能」『国語・国文』第46巻50号
- 塚原鉄雄 (1987) 『新講 古典文法』新典社
- 塚原鉄雄 (2002) 『国語構文の成分機構』新典社[塚原鉄雄の遺稿集]
- 時枝誠記 (1941) 『国語学原論』岩波書店
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語編』岩波書店
- 時枝誠記 (1954) 『日本文法 文語編』岩波書店
- 富井健二 (2004) 『古文読解をはじめからていねいに』東進ブックス
- 中村幸弘・高橋宏幸・碁石雅利 (2001) 『正しく読める古典文法』駿台文庫
- 根岸正純 (1968) 「接続助詞『て(で)の用法の文体論的考察』」『岐阜大学 教養部研究報告』第4号
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」くろしお出版
- 松尾聡 (1973) 『増補改訂 古文解釈のための国文法入門』研究社
- 松下大三郎 (1928) 『改撰標準日本文法』中文館書店 (テキストは1974年の勉誠社の復刻版)
- 松村明 (1942) 「主格表現における助詞『が』と『は』の問題」『現代日本語の研究』白水社
- 松村明編 (1969) 『古典語現代語 助詞助動詞詳説』学燈社
- 松村明 (1998) 『増補 江戸語東京語の研究』東京堂出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 村上本二郎 (1966) 『古典文解釈の公式』学研
- 森重敏 (1965) 『日本文法 - 主語と述語 - 』武蔵野書院
- 森野宗明 (1971) 『古文標準問題精講』旺文社
- 山口堯二 (1980) 『古代接続語法の研究』明治書院
- 山口堯二 (1996) 『日本語接続法史論』和泉書院
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館
- 山本康裕 (2006) 『古典文法』P H P
- 湯澤幸吉郎 (1940) 『国語学論考』八雲書林 (テキストは1979年の勉誠社の復刻版)
- 吉田金彦 (1970) 「て(とて)・して・で・つつ・ながら・や(し)〈ても〉」『国文学 解釈と鑑賞』第35巻11号

(付記)

本稿を作成するにあたり、山本康裕先生、大沼敏男先生、竹部歩美氏、中野真樹氏からは貴重なご意見をいただきました。また、中村幸弘先生、杉浦克己先生からは古典の学校文法についての多くのことをご教示いただきました。御礼申し上げます。